

十一月八日

富山県知事より厚生功

労表彰状を受ける

十一月二十三日

福岡町長より地方自治

発展の功績に対し表彰

状を受ける

平成六年二月十七日

「シベリア回顧録」

(自分史の一部分)を

発行する

(富山県 山田 秀三)

私の抑留中の思い出

富山県 室 田 幸 雄

終戦後既に五十数年が過ぎて、時の流れと私の老化で記憶が薄れ、多くの事を忘れてしまいました。それで思い違いの事もあるかもしれませんが、私の生涯での悲惨な思い出の一つとして、できるだけ多くの事を思い起こして書き残してみようと思います。何かの参

考になれば良いかなと思います。

私、昭和十九年（一九四四）年九月に軍隊に召集されて、昔の満州ソカトン飛行場（今の藩陽、旧奉天の近く）に陸軍飛行兵として補給中隊に配属され、戦闘機や爆撃機への人員、物資、燃料、武器等の運搬のための自動車、側車の運転を主に兵隊としての訓練を受けました。

昭和二十年八月九日、ソ連軍が満州へ越境侵入して来ました。そのとき私は公主嶺の学校にいましたが、急遽体一つで原隊に飛んで帰り、一睡の暇もなく防戦迎撃の準備に追われました。敵の攻撃から守るべく兵器を移動し穴を掘って隠したり、終戦になるまでの一週間、食べる間も惜しみ、ほとんど眠ることもなく徹夜で作業に追われていました。体はくたくたに疲れ果ててしまいダウン寸前でした。

十五日午後我々はラジオの周りに集合させられ、日本が無条件降伏した、戦争に負けたと知らされました。私は深い悲しみとむなしさで涙があふれてきました。しかし反面これで楽になれる、もしかして日本に

婦り、両親、兄弟、姉妹にまた会えるかもしれないと、かすかな望みが出てきました。

しかしこの日以来、我々の權威は失墜して、村の住民に我々の大事な食料、衣類、豚、鶏等の家畜がしばしば略奪されました。ただでさえいつ帰国できるかわからない我々には命を支える大事なもので、節約させられていたので口惜しく残念でした。

ある日、この付近の地理に詳しい現地採用の兵隊が、望郷の念に耐えきれず、自分の家に帰ろうと一人で部隊を抜け出したが、数日後帰路近くの草原で丸裸にされて死んでいたとのことでした。

私たちは十月末に奉天市に集められ、貨車で一カ月掛けて中ソ国境の町、黒河へ行きました。ここで一番困ったことはトイレでした。皆、貨車が止まるとその下に入り用を済ませました、それで貨車の出た後は人ぶんの山でした。また、尻拭く紙がなく、そばの草、石、自分の被服をちぎって使いました。

十二月の中旬に、アムール川（黒龍江）に笹舟を並べて、その上に板を敷いた船橋を渡ってソ連の町ブラ

ゴエシチェンスクに入りました。そこに一週間滞在しました。その間ロシア人は皆私たちに、「お前ら日本人はウラジオストク経由でもうすぐ日本に帰るぞ、良いね！（ヤボンスキー スコリカ ダモイ オオチンハラシヨ）」と言われ、半信半疑ながら帰国の順番を心待ちにしていました。しかし貨車に乗るため駅へ行ったとき、貨車の側面に先陣が書いた、「帰郷の夢破れてシベリヤの月を見る」という落書きを見て、だまされたかなと不安になりました。そして、しばらくしてその言葉の意味が分かりました。なぜなら我々の貨車は、戸のすき間から差し込む月の光で、西に走っていることが分かったからです。

私たちは帰国の望みを失い、死ぬ事も覚悟しました。私はすべてを神仏の導く運命にゆだねることにし、少し心が落ちつきました。一週間貨車に揺られてバイカル湖近く、ジマ市郊外のバランスキイク捕虜収容所に入りました。ここで入門の際掛けていた眼鏡以外、予備の眼鏡、万年筆、腕時計、大事なものが入った背のうごと全部没収されてしまいました。

後日、縫い針、石けん等返してくれましたが、私は掛けていた眼鏡を物にぶつけて壊してしまい、その後復員までの一年半、盲人のように大変不自由な思いをしました。

入所の翌晩、我々は先発伐採隊の百五十人に選ばれて、直ちに無蓋貨車に乗車し、山奥に向かって零下二〇度を越す寒い夜中、二時間、林の中をのろのろと登って行きました。私たちは凍傷から身を守るため手、耳、鼻をすり、足踏みし、車台から転落しないようお互いにしっかりと抱き合っていました。夜中に昔ソ連の犯罪者が入っていた収容所に着きました。その夜はそこで疲れと寒さからの解放でぐっすり眠りました。それ以来二週間ここが私の住み家となりました。

翌日から我々は二十―三十人のメンバーの数個のグループに分けられ、そして二人で一組になって森林伐採のため山奥へ入って行きました。

ここで最も辛苦だったことは寒さと飢えでした。夜中、小便に起きても、屋外の遠いトイレには誰も寒くて行けず宿舎の前で用を足すので、朝にはそこは一面

の水で立派なスケートリンクができていました。また、百五十人の捕虜に一日わずかに五キロの米の支給、それに毎食小型マッチ箱ほどの一切れの黒パン、一つまみの野菜という劣悪な食事でした。飯盒によそったご飯は、お湯の中に教えられる程の米粒が沈んでいるものでした。

我々は食事の前、腹いっぱい水を飲み、わずかな食べ物で満腹感を味わい、空腹を水飲んで忍びました。また、飢えのため、雑草はもちろん、ある人はウジのわいたカラスの死肉さえ煮て食べました。

零下三〇度の寒さで凍傷にかかり指を失った人もいました。私は吐く息で眼鏡が曇り先が見えず、部屋の戸にぶつかって眼鏡を壊してしまいました。我々は皆栄養失調、栄養不足でひどい脚気になり、足が上がりず引きずって歩いていました。道に丸太が転がっていてもそれを跨ぐことができず、はって通りました。私も栄養失調、脚気から急性肺炎にかかり、ついに倒れて動くことも叫ぶこともできなくて意識不明になりました。その頃、多くの僚友も病氣衰弱で次々と亡くな

られました。私も薄れる意識の中で、いよいよ死ぬ時がきた、もう駄目だとすべてをあきらめました。しかし、天は私を助けてくれました。幸運にもたくさんの病人の中で、私は最初入院患者七人の中に選ばれました。そして雪の中、馬そりに乗せられてジマ市の病院に運ばれました。

病院に着いても自分では動くことができず、玄関の土間に寝ていました。二人の看護婦が担架を持って来て私を乗せたまま浴室に連れて行き、シャワーで私の垂れ流しの汚い体を洗い、汚れた下着をきれいなものと着替えさせてくれました。そして病室に運び柔らかい寝台に寝かせてくれました。そのベッドの温かい心地良さに私はまるで天国にきたような気持ちになり、三日間飲まず食わず少しも動かずベッドに横になってほとんど眠っていました。その間日本の軍医さんが薬を持ってきてくれ、ソ連の女医さんが診察治療をしてくれました。彼らの治療のおかげで私は少し食べられるようになり、ゆっくり上体を起こせるようになり、日ごとに元気になり病気も回復してきました。その反

面一緒に入院した僚友の半分は段々と病状が悪化して、一カ月ほどのうちに亡くなりました。皆の目の前で死の寸前まで日本に帰りたい、帰りたいと涙してつぶやいていた僚友たちを今でも思い出すことがあります。生死の運命の分かれの不思議さをつくづく感じています。私たち七人のあとたくさんの病人がここに入院して来て百五十人余りでいっぱいになりました。そして毎日一人二人と悲惨な死を遂げていきました。死体はすぐ裸にされ毛布に包まれて屋外の新設の棚に置かれます。零下三〇度でカチカチの冷凍人間に変わります。ただ哀れという言葉しかありませんでした。そして翌朝数人の日本人捕虜が来て、遺体を担ぎ野山や森林の奥に運び、冥福を祈り懇ろに埋葬しました。

私は奇跡的に周りの皆さんの温かいお世話に助けられて二カ月で退院できました。そして元の収容所に帰り、急に新設された一日六時間労働の軽作業班に入り、班長をさせられました。

その後は二十数人と共に、駅構内の清掃、民家の便所の汲み取り、鉄道線路の枕木交換、パン工場の使

役、穴掘り作業、農場での大根、ジャガイモ掘り、冬には井戸が凍って水が出ないので川へ鋸、鉄棒を持って川の氷取り、最後の頃は製材所で製品の運搬、等級別の仕分け作業、夜間のボイラー炊きなど色々のことをソ連人と一緒にやってきました。時々その頃の様子が今でもはつきりと思い出されることもあります。過ぎてしまえばどんな苦勞も懐かしい思い出に変わってしまいます。

私は昭和二十二年五月にソ連のナホトカ港から日本の貨物船で舞鶴港に帰り、そこですぐに復員し、両親の待つ富山に帰って来ました。ナホトカ港で赤十字をつけた迎えの貨物船に乗るとき二年ぶりに日本の看護婦さんたちを見て、何と美しい人たちなんだろうと感激しました。私のロシア滞在は一年半と短いものでしたが、私には人生の中で最も良き勉強になり、代え難き経験を得ることができたと思つて感謝しています。

冬の寒さで大きな川が五〇センチ以上の厚さに凍ること、柱を建てるのに地面が凍つて穴が掘れないが柱の周りに砂を寄せて水をまけばコンクリートで固めた

ようにしっかりと立つこと、冬の炊事や洗濯等の水は川の氷を取ってきて倉庫にたくさん蓄えておき、それをかまで溶かして使うこと、夏は余りの暑さでのどの渇きに耐えられず、ボウフラのわいている下水の水を目を閉じ鼻をつまんで一気に飲んだこともあった。朝の洗顔も屋外にできる霜柱を両手でかき集めて顔にかけて洗ったこと、とても冷たくサッパリして気持ち良かった。

平成四（一九九二）年夏、全国強制抑留者協会の戦友の墓参活動に参加し、八日間ロシアのバイカル湖畔の十八の墓地と七つの都市を訪問してきました。そして戦友の霊に冥福を祈り、病院で親切に看病してくれた医師、看護婦を思い、その人たちには会えなかったが、あちこちで出会ったロシアの人に、昔受けた恩への感謝の気持ちを述べてきました。

人間は欲を捨て、我を離れれば、皆親切な良い人ばかりで、争いもなく、皆で助け合い、楽しい平和な暮らしができるのではなからうかと、私の甘い考えでしょうか？